

2025.11
NOVEMBER
No.31

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊 [おらんくの大学病院]

RANK

RANK 2025.11 NOVEMBER No.31

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊 [おらんくの大学病院]

【発行日】2025年11月20日 【発行】高知大学医学部附属病院 広報係 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL088-880-2723

病変のストーリーを読み解いていくことこそが
病理医の真髄

病理診断科 教授 倉林 睦



高知大学医学部附属病院



<http://www.kochi-u.ac.jp/kms/hsptl/index.html>



＼広報担当者のつぶやき／

医学部のある岡豊キャンパスのヒポクラテスの木は、倉林教授が医学部生としてキャンパスライフを送っていた当時は、1mに満たない小さな木だったそうです。今では立派な大木に成長しています。

病変のストーリーを読み解いていくことが 病理医の真髄

大学院修了後も母校に残り「病理学」の世界に長く身を投じてきた倉林 睦教授は、故郷の静岡を離れ、ここ高知大学の研究室で自身が選んだ研究世界と静かに対峙し続けている。

倉林先生が病理診断科を選択されてから、病理医に至った経緯をご説明ください。

高知大学卒業後すぐに外科に入局し、大学院に進学しました。大学院では研究するにあたり、現在の病理学講座、当時の第2病理学教室に向向しましたが、こちらで毎日病理組織と向きあっているうちに、組織観察や診断の魅力に取りつかれてしまい、その上研究に対する憧れも強く、病理医の道を選択しました。

取りつかれたと仰るほどの専門領域の魅力を教えてください。

まず病理診断科は顕微鏡により組織の有無や病変の種類について診断する、病理組織診断を主な業務としています。

チャンスの入り口は、自分の目で見極めよ！

病理診断科 教授

倉林 睦 (くらばやし あつし)

1991年4月 高知医科大学医学部 医学科 入学
1997年3月 同 卒業
1997年4月 高知医科大学大学院 医学研究科 入学
2001年6月 博士(医学)取得
2002年7月 高知医科大学医学部 第二病理学教室 助手
2013年4月 高知大学教育研究部医療学系 医学部門(病理学) 准教授
2025年9月 高知大学教育研究部医療学系 医学部門(病理学) 教授
現在に至る

[専門分野] 病理診断全般

[専門医等資格] 病理専門医研修指導医・病理専門医、細胞診専門医

高知大学医学部附属病院には、病理診断科と病理診断部があり、病理診断科は外来業務を有し、一方の、病理診断部は院内における組織の病理診断を主とし、病理解剖は共同で行っています。

病理組織診断の最大の魅力は、やはりそこで見られる組織学的変化を手掛かりに、その疾患の本質を理解しようとするところにあります。

病変の組織には、臨床症状を説明し、疾患の原因や経時的な病変の容を示唆し、そこには障害に対する生体の精緻な防御反応までもが混在しており、我々はそこで極めて動的なシーンを目の当たりにします。

観察している病変のこれまでのストーリーを読み解くことで、治療方針にも関わってくる重要な情報を得ることが可能になり、さらに未知の分野の解明や新たな治療を開発しよ

うとする探究心も生まれます。まさにここが私が病理診断に最も魅力と感動を感じる部分なんです。

ありがとうございます。

先生の思いや取り組み方がとてもリアルに伝わってきました。

ところで、先生の1日の仕事の流れを教えてください。

基本的なところでしたら、午後と翌日午前中に、その日に出来上がった組織切片の病理組織診断を行います。この間も適宜、術中迅速診断を各臨床科からの提出時間に合わせに行っています。また、組織標本作成のための手術材料からの切り出し作業なども臨床検査技師と相談しながら診断業務の合間に行います。それ以外は研究や授業などに充てていますね。

限られた時間の中での

仕事、研究…

お話を伺っていると、

そのハードさを

楽しんでいるようにも

お見受けできます。

まさにそこが私の核心部分なんです。そもそも好きでたまらない職業についているので、毎日の仕事の大変さが、むしろ楽しくてしょうがない。全く苦にならないのです。

病理組織診断は、患者さんの疾患診断のアンカーという責任

仕事における、ご自身の

決め事などはありますか。

はい、もちろんあります。病理組織診断は患者さんの疾患診断のアンカーだという考えです。基本的に診断後に治療が始まるため、我々の役目は診断から治療への橋渡し役と思っています。ですから当然ではあります。自分が完全に納得しきれいななければならぬ。時に種々の理由から確定診断に至らない場合もありますが、主治医と密にコミュニケーションをとりながら、治療に役立つ情

報を選元できるように最大の努力をする。これが、この科の医師になった時からの自分との約束ですね。

医師という職業に携わる中で、最もうれしい瞬間は

どんな時でしょうか。

私も病理診断科の医師は、患者さんご本人と直接関わることはあまりありませんが、主治医の先生方が「あの患者さんは、先日元気に退院されました」とか「疾患が治癒しました」などと喜んでくださる時が、やっぱり一番うれしい時ですね。医師冥利に尽きる時かもしれません。

ではこれからの病理診断科を

担っていく若手医師たちに、

先生からのエールをください。

医学部にはいろいろな科があり、各々の科には生涯をかけて研鑽を積み重ねていく先生方がおられます。ですから当然ではあります。自分には興味があれば、どの科に行っても後悔することはないと思っています。また、科にしても、研究分野にしても科内の治療グループにしても、自身の進路を決めるときの基本は、朝起きて「さあ今日も頑張るぞ!」と思える進路を見つけて選ぶことだと思っています。寝食も忘れ全力を注げる

君に頼もしい未来が訪れますことを!



きつかけは、研究者だった 伯父への憧れから

母方に、医師ではありませんが大学の医学部で研究を行っていた大好きな伯父がおりました。夏休みにはよく遊びに行き研究に没頭している姿を見たことが、私が医学の道を目指す直接的なきつかけになったように思います。

もともと観察することが好きな子どもでしたので、地元静岡県の浜名湖などで、水中生物に夢中になっていましたね。

また小学時代には、養蚕農家の祖父母の家で、蚕の幼虫を飼育部屋から繭を作る部屋へ移動させる手伝いをして、駄賃の代わりにもらった幼虫を成虫に育てて産卵させ、そこから成虫までの観察記録を夏休みの自由研究として提出したのが、私の研究者としてのスタートだったのかもしれないですね。

病理診断医になる 決定打

人体の組織を顕微鏡で最初に覗いたのは、小学校2年生の時でした。両親にねだった望遠鏡が、どういいうきさつからか、子ども用の顕微鏡に化けてしまいました(笑)。

実はちょうどこの時、夜間に無症候性血尿が出てしまい、医師でもない母が、いきなり私の尿をスライドガラスに取って、「睡、見てごらん、これが赤血球だよ。真ん中がへこんでて面白い形だろう。これが酸素を運ぶんだよ」と言っていて私に見せたことが、細胞を見た始まりです。それはとても新鮮で衝撃的な体験だったのです。幼い私は自分の真っ赤な尿を前にして「いや、お母さん、この状況はそんなのんびりしてたらダメなんじゃないか」と動揺を隠せず、母はそんな私に「あら、あんたちよつと顔が青ざめてない?」と言う

のです。父は母の後ろで「血尿出してるんだから、子どもが動揺して当たり前だろう」と呆れていたのを今も鮮明に覚えています。

いつの間にか 鉄道ファンに なっていた

私の家は静岡県西部の東海工業地帯にあり、近所のお父さん方も工場勤務でした。小さい頃父に見せられた、工場内の大きなプレス機をカッコいいと思いましたし、どんなトラブルにもすぐ駆けつけていく父の姿を見て育ったせいも、完成したものが空を飛んだり大量物流で活躍する光景を見ると自然に感動します。ですから飛行機ならエンジンが見える翼の上の場所が私の特等席です(笑)。

せんが、昔から鉄道が好きでした。特に興味を持った理由としては、手荷物検査もなく簡単に乗車できる上、抜群な正確性を誇り、それぞれのプロが車両整備、保線、接客等の連携あつていっている。その完璧さに、父の仕事にも相通する息遣いを感じられて好きになったのだと思います。

また、言わずとも整列乗車する乗客をはじめ、無意識に定時運行に協力している人間行動の不思議さもある公共機関ですから、長い時間駅で見ている飽きないのです。

さらに、よく駅員や運転士が指差し確認をしています。が、示唆喚呼は人間の意識を考える上で医学的、社会的、生物学的側面のすべてが総合的に凝縮され、よく見えるシステムであることも大きな魅力です。

そういった理由から、よくある〇〇系とかはあまりわからず、同士のいない「一人鉄オタ」を専ら楽しんでいきます。

子どもの時から変わらないもの

未だに、人間が時間をかけて作り上げた機械や精密なシステムには惹かれてしまいます。

叶えたい夢

そもそも大好きな今の職業が、叶えたい夢であったのです。

休日の過ごし方

私には「休日」という概念がなく、ちょっとした時間が空くと、実験したり好きな仕事をしているとそれで満足です。

人生で一番悩んだこと

小さな悩みはいつか思い浮かびますが、好きな仕事に夢中になっていると、悩みごとはすっかり忘れていて…これは僕の特技かもしれません。

「見てごらん、これが赤血球だよ！」 母の一言の衝撃が、私を病理診断医にした

陸少年の観察研究のスタートは“蚕”のふ化!? 少年時代の稀有な体験から、現在に至るまでのドラマチックなプロフィールのすべてを覗かせてもらいました。

行ってみたい場所

自分の見たことがないものを見るのが好きなので、ドキュメンタリー番組などは「深海の世界」的なものをよく観ます。なんでこんな形になったのかとか、食物連鎖はどうなっているのかとか。たとえば、この細菌は硫化水素をエネルギーにしていますなどのナレーションを耳にしてしまうと、たまらない幸せを感じ、一度行ってみたいと思っています。

現在の楽しみ

時々、妻と夕食のために外出することくらいでしょうか。お客さんを喜ばせるために、手の込んだ献立を工夫を凝らして作ってくれる料理人ならではの気質を感じながらいただく食事は、至福の時間です。

高知に住んでみて

もともと静岡県からやってきましたが、高知には風景や食べ物などおすすめしたい場所やものがたくさんあります。基本的に、私の感じる土地の魅力とは、「風土とそこにいる人たち」によって決まってくると思っています。



ブドウ狩り、ブドウを観察



幼少の頃、浜名湖で水生生物に夢中になる



蚕の幼虫。これから脱皮を繰り返して白い成虫になります。(夏休みの自由研究)

- 好きな食べ物 / 柿などの果物全般、牡蠣 (苦手な食べ物はありません)
- 好きな動物 / ギョウ虫類全般
- 好きな画家 / ジョルジュ・ルオー
- 好きな作家 / 北杜夫

- 好きなスポーツ / 射撃(オリンピックを見るだけ)
- 好きな言葉 / 朝有紅顔誇世路 暮有白骨朽郊原 (朝には紅顔ありて世路に誇れども、暮には白骨となりて郊原に朽つ) 漢文をきっかけに、そのかっこよさから高校生の時に覚えた言葉です。「諸行無常」の意味があり、それゆえに社会に出てから、今日一日頑張ろうと思えて、今では好きな言葉になりました。

